

## 虐待的なかかわりをするような保育者は見抜けますか？

いいえ、見抜けません。もちろん、未就学児保育・教育の専門教育を受けていても言葉や行動が暴力的、圧力的な人はおり、それは「見抜く」以前の話です。ですが、「そのように見えない」人が虐待的かかわりをする可能性は十分にあります（※）。

## 「やってはいけない」と考えれば、やらないと思うのですが？

個人による暴力では、そう言えるかもしれません。いわゆる「自己制御 self-control」や、「自分の行動の結果、因果関係を考えるスキル」が止める力になるでしょう（小児性暴力はほぼ精神疾患に属し、治療の対象ですから別の話です※※）。でも、個人による暴力の背景にも、以下に述べるような集団／権威の圧力があるケースは、未就学児施設の場合、少なくないと考えられます。

集団による暴力は、別の心理的力学（下）によります。たとえば、「福田村事件」で検索してみてください（ナチス・ドイツや関東大震災後の朝鮮人虐殺を例にとると「日本人は違う」「外国人は別だ」等おっしゃる方がいるので）。「集団の皆がそうするなら、自分も（多少の違和感があっても）この集団の中の一員なのだから、同じようにする = 集団の一員として認められたいから = 集団から疎外されたくないから」という指向が人間には強くあります（「自分たちは違う」「あいつらは…」という排除的線引きはこの指向の表れの典型で、「日本人は違う」もそのひとつ）。

権威者（この文化の未就学児施設の場合は、クラス・リーダー、主任、園長、理事長等、年上の職員も）の圧力にも、同様の力があります。

### ★暴力の背景にある力学：conformity（集団のルールや権威の圧力に従うこと）

人間は集団の生き物であり、「自分はこの集団の一員だ」「この集団の中に溶け込んでいく」という感覚を希求する

20世紀前半から社会心理学の分野で徹底的に実験研究が行われているテーマです。わかりやすいのはアッシュ博士の1951年の実験。「左の線の長さと同じ線はA～Cのどれか？」と聞かれた実験参加者グループ。実は本当の参加者は1人だけで、残りは実験協力者。実験協力者が全員、正しくない答えを「これだ！」と言うと…。本当の実験参加者の75%（4分の3）は実験協力者と同じ、正しくない答えを選んだのです（「どう考えても違う」と思いながら）。



有名なミルグラム博士の電気ショック実験（1961年）でも、実験参加者は全員、指示する権威者の言う通り、目の前で見えている対象に電気ショックを与えました（実際はショックを演じているだけ）。参加者の65%は指示に従い、「死ぬかもしれない」と言われた最高電圧までショックを与え続けました。

## 良心があれば、止めたり、報告したりする職員がいるのでは？

止めたり報告したりした結果、その集団（クラス、園、住んでいる地域）から疎外されるリスクのほうがこの文化ではとても大きく、また、集団に帰属していたいという欲求や、集団の中で自分の力を維持したいという欲求も、この文化ではきわめて強いため、実際の例が示している通り、「良心」はほぼ役に立ちません（転職が容易な状況なら「良心＝（集団）退職」にも）。

施設長や理事長が積極的に「虐待的なかかわりはしない。自分自身、職員にも子どもにもしない」と表明し、日常的にそのように行動していれば違います。予防の基本は組織のリーダーシップの行動（言葉だけでは無意味）。前ページの2つの実験のどちらも、他に一人でも「違う」「ダメ」と言う人（＝味方）がいれば、「答えが違う」「ショックは与えない」と言える確率が上がりました。

## 「不適切な保育」の線引きは？

高山静子先生は添付資料のように定義しています。すべて、成長発達にとっては悪影響を及ぼし、子どもに対するかかわりとしては効果もありません。また、高山先生が『保育内容5領域の展開』（2022年）に書いている通り、発表会や運動会などで「ピタッとそろった」行動を子どもに要求することは、成長発達の段階に合わず、そもそも保育として不適切です。

今は、特に保護者がそういった「成果」を要求するため、保育者は子どもたちに不可能なことをさせざるを得ず、結果、叱責や練習の強要など、虐待的なかかわりにつながります。そして、ここにも別の心理的力学（下）が働きます。「子どもたちに〇〇をさせなければならない」「うまくいかなかったら恥ずかしい」「うまくいかなかったら、保護者／園長に怒られる」という職員、クラス、園の（暗黙の）目標が、個々の職員の行動に影響し、虐待的なかかわりを職員の「保育者としての役割」にすり替え、悪化させるのです。もともと、子どもは「おとなの言う通りにするべきだ」という考え方が園（保護者も含む）の中にあり、「おとなの意に沿わない子どもがいる」という認識があれば、園、保育者、保護者は「おとなの言う通りにさせるべきおとなの役割」を引き受けていきます。それが結果的に暴力的であっても。

## ★暴力の背景にある力学：集団の中での役割の引き受け

有名な「スタンフォード監獄実験」（ジンバルド博士、1971年）では、看守役と受刑者役に参加者を分け、監獄を模した環境で実験を始めたところ、看守役が暴力的になり、受刑者が服従的になり…、数日で中止されました。この実験の妥当性と再現性は、後の類似実験「BBC監獄実験」等でかなり否定されていますが、BBC監獄実験でも集団の中で力を持つ者の圧力や、参加者が実験と知りつつも役割を内面化する（自分のアイデンティティにしていく）状況は観察されています。

## 力で止めなければならぬことはあるのだが？

いわゆる「グレーゾーン」の子ども（※※※）、発達支援の必要がある子どもについては、配置がもともと足りない以上、職員が子どもの行動を体で制御せざるを得ない場合があります。また、子どもがどこかから落ちそうだという時に、手を引っ張って守ることもあります。でも、子どもが保護者に「今日、先生にいやなことをされた」と言ったら？

いまや、これは十分に想定してクラスに（録音機能のついた）ビデオを設置しましょう（ネットワークは不要。ドライブレコーダーで十分）。そして、必要な時には当該保護者と、必要であれば自治体担当課に見せます。保護者が子どもの状態を理解すれば、子どもが支援を得られる確率も上がります。保護者は認めないとしても、自治体は「不適切な保育ではない」と理解します。

- ビデオ設置を保護者に知らせるひな型は、2月に出します。

## 今まで「よい」と思ってしてきた保育が否定されているように思うのですが？

人間は進歩する生き物です。日本でも、明治時代の教育より昭和の教育のほうが良くなってきたはずです。未就学児の成長発達についても、たとえばピアジェが「外から見える子どもの姿」を記述していた時代から、過去数十年は脳科学で「赤ちゃんの脳の中で起きていること」を記録する時代になり、ピアジェが言っていた変化はたいへい、もっと早くから始まっていることがわかってきました（だから、生まれたその日から「あたたかな言葉のかかわり」が必要←『ペアレント・ネイション』）。

昭和の時代の未就学児保育・教育がより良く変わっていく、そのためのひとつのきっかけが「不適切な保育」をめぐる動きだと考えましょう。

「でも、自分たちもこうやって育ててきたのだから」…？ もう一度、言います。人間は進歩する生き物です。「そうやって育てられた」あなたは、ダナ・サスキンド博士が『3000 万語の格差』『ペアレント・ネイション』で何度も何度も言っている、「その人が持って生まれてきた可能性を 100%、伸ばすことのできた結果」ですか？ 違いますよね（私も違います。私の親も違います）。「こうやって育てられたのだから、今の子どもも同じように育てればいい」「子どもたちは、自分たちと同じレベルの生活をできればいい」では、人類は進歩しません。ただでさえ、日本でも米国でも他の国でも、今の子ども世代はその親世代よりも経済的には豊かになれないのが現状です。地球も（私たちおとなのせいで）壊れつつあります。その中で子どもたちに「今までと同じでいろ」と言っているのでしょうか？ それでは、この子どもたちは今の、どんどん大変になりつつある社会で生き抜くことができません。

## 虐待的かかわり、暴力等が発覚した場合は？

一般的に言える対応法はありません。施設長は知っていたのか知らなかったのか、誰が誰に報告（通報）したのか、自治体は知っているのか、マスコミは知っているのか等の条件によって、対応はまったく異なります。このような危機（クライシス）対応は、素人である園がするとこじれるリスクが上がります。専門家に任せるべきです。ただし、弁護士は「法的な責任」を考える専門家であり、マスコミや保護者とのコミュニケーションは専門ではありません（例：「捜査中なので何も言えません」が状況を悪化させるリスク）。

- 「保育の安全」（🔍検索）サイトのトップページに、緊急対応等のリンクがあります。

<https://daycaresafety.org/>

※ 未就学児施設では「自己評価」が中心になっていますが、調査項目や調査票を作るのがスキルの柱のひとつである社会心理学者として言わせていただくと、自己評価はその人の主観的自己を示している以上に、この文化ではその人の謙遜度を示しているだけで、評価法としては効果がありません（自己評価というのは、他己評価との比較のためにおいてのみ有効）。私たちは施設の中で、園長から職員までを対象に使える「スキルの他己評価尺度」を作りました。

※※ 子どもに性暴力等をしてしまう不安を感じた場合は、以下の通り。

- ・ 性障害専門医療センター <https://somec.org/>
- ・ 筑波大学教授 原田隆之（心理学）

※※※ 「グレーゾーンの子どもが増えている」というのは、現場の先生たちから聞く限り、事実のようですが、これはいわゆる「発達障害」が増えているのではなく、今の子どもたちが、おとな（まずは家庭にいる保護者たち）と関わってもらっていない結果ではないかと私は考えています（『3000万語の格差』『ペアレント・ネイション』を訳した者として）。未就学児施設では、そのぶんを補完しきれません。「手のかからない子ども」は一人もいませんし、「手をかけなくていい子ども」も一人もいません。すべての子どもにおとなが余裕と無駄をもって山ほどかわらなかつたら、子どもの脳の中に認知スキルも非認知スキルも育ちません。結局、「グレーゾーンの子どもが増えている」になっているのでしょう。

「発達障害」「学習障害」と言いますが、いずれも「脳の都合」であって「障害」ではありません。こういった個々の脳の都合を「障害」にするのは、「フツー」をきわめて狭く定義しているこの社会ですし、未就学児期に発見して（本当の）特別教育専門家が介入・支援すれば、「障害」にはならず、その人の「脳の都合（特徴）」を活かしていくことすらできます。もちろん、社会が「フツー」という狭い定義をやめることも大前提ですが。